Osaka University Knowledge Archive

Title	伝播した意匠
Author(s)	高田, 克己
Citation	デザイン理論. 1965, 4, p. 36-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52469
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

伝播した意匠

古代中国系文化圏にみられる Design の変貌について（概説）

高田克己

序

意匠（Design）は生活の現実的契機において為されるものである。古代中国に根をもった意匠の法則を、文化伝播の経緯からみれば、後進（古代日本）民族の生活的契機においては、そこに変貌した様相として見出される。しかし、その意匠構造は、内面的な創造作用に相関して、客観化された抽象形態で把捉されていることが察知できる。

1

中国古代には、宇宙論的原理をもった意匠法が存在した。(1)「天」を象徴するのは、円形であって、その画具には規（コンパス）を用い、その数値に奇数を当てて陽の位にあるものとした。「地」を象徴するのが方形で、画具は直角をもち、度を刻んだ矩（尺）であり、偶数を当てて陰の位とした。その円と、方と、直角三角形を組合せ、それに数理的な関係を加えた構成法で基本形をかたちづくるような、すなわち「規矩」の法が考えられていた。したがって、それは「天地」の存在を意味した象徴の形態になるのであって、万物の生成、営みは、その中で行なわれるのだとした宇宙論的な考えのもとにあった。

このような規制された枠の中で、意匠は為されるのであるから、いうまでも

なく無限な自由さはなく、自ら限界があった。それは「礼」の社会にのみ通用することであった。「礼」の本質は「天」の命に応え、「天地」の法則にしたがって、人は行為すべきだとしたところに出ている。「天」に応じて「地」は運行し、自然は成育するのであって、そこには「象」があるとした。そして「天地」には神格があることを認めていた。[2] 自然の現象や物象にある秩序は「天」の示教であって、「造物」の真理も同時にここに発するものだとしている。したがって「規矩」によって整えられたあらゆる形態には、「礼」の本体が内在するものと信じた。すなわち「法象」が具わるとした。「法象」[3] は造形的には幾何学的な抽象形態で表わされる。 Laufer. B はその著 Jade の研究で、考古学的な見地から推して、「先史中国では、天体現象は、つねに形而上的抽象の思考の上にたつものであり、天文と数術は、臆測的な学説の中でかたく結ばれていた。宗教は実質上の天文学的、宇宙的なものであって、それにともなう名数と数量的な法式をも究めていた。そしてあらゆる事柄をもそれに帰してしまう」のだとして、さらに「大自然の現象には神霊が宿っているものとして、それを幾何学的性質の場の中で象喩することを拵えあげていた」と述べたのは、前記のことを洞察していたからである。[4] このことは、意匠学的に究明を経てきたいまでは、名数と数量的な法式による幾何学的な形体形成の技術がある程度明らかになった。

遡って円と方の単純な幾何学的形態をもって象徴としたことは、一体何処に因を求めたらよいのであろうか。一般的には具象的な自然のイメージから発展したとするのが常道と考えられている。がんらい上代中国の哲学的思考の過程で、つねに引例されるところには、必ず人間の感覚に訴えられる現象があげられた。一応は感覚を通したものでなければ理解も納得もされなかったのである。それは中国民族の特徴とされている。[5] そのために中国文化圏では、後世まで抽象的論理の展開がなかったのだといわれている。古典にみられるように

古代中国民の自然に対する畏怖の念は強く、大自然には神霊があると信じ、そこに起きるイメージは感覚的な形相であった。而してそれは客観的にもっとも単純で端正な、強い印象を表わす形態による表現となるであろうことが考えられてくる。

いまでは、世界の各地の遺跡から、多くの幾何学的形態を印した遺物がでている。幾何学的形態の表現については、古代民族の一般に通有するものがあるが、それが形成される根拠については、学者間の見解は必ずしも一致してはいない。しかし、いずれにしろ古代人の生活的体験から、肉体的に直結したあらゆる感覚を通じての形態表現であることは確かである。それは人間の創造作用として、現実的契機にはたらく具体的な統一作用であるとする存在論的な解釈からも理解できる。

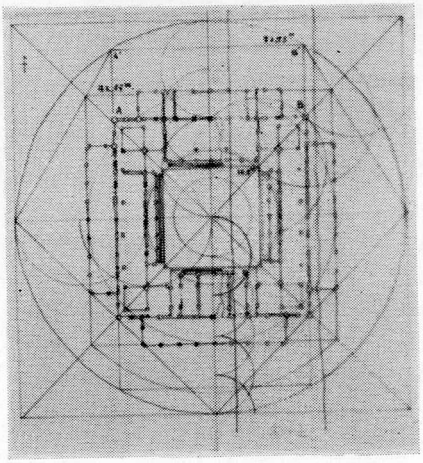
そのようなことを証明するもっとも手近い具体的史料は、多くの中国古典であろう。しかしそれらについては、意匠学的資料として読解を新にしなければならない。そこには推移した文化の様相とともに、意匠的変遷の様態をもふくめて、独得の記述がなされていることに気づくであろう。

2

たとえば往古に「観象授時」による農耕の生活が続いたことがわかり、そのために、地上で方位を定める必要や、その測定法が考えられ、やがて天象、季節の時間的推移とその循環の法則が知られる。それが時空間的な形象として、幾何学的図形で表現できることも知られてくる。そして角度や円周の分割法や、それの数量的な配分について、図画用具（規と矩）によれば、正確にあらわしうることも気づいたのである。やがて目的図形を画くまでの描線の軌跡などを加えて文様とし、あるいはそのまま抽象的表現とした。さらに直角三角形の性質と尺度の組合せは、「勾股弦」による算法[6]と、その応用展開を可能にし、企画設計の技術をも生むにいたったのである。これはまた東洋的数学の発

達の端緒にもなっている。[7] 他方に陰陽説や易法から、「象数」[8] をつくったが、これらは東洋文化（中国系）圏にとっては、後々まで生活面でとくに迷信的位置を占めていて、特殊な文化的潜在態をなしたのである。

このような「礼」の制度の造形システムは、「規矩」による意匠（Design）法から、形体としては限られた規範内で操作する技術を生みだし、しかも秘法相伝の歴史的な道程がたどられた。幾何学的形態と数理的関係は、建築営造の法式にまで発展し、（第一図）[9] またあらゆる造形文化は相互に連関して、特有の東洋的造形態を創りあげた。「礼」の社会制度は、「儀礼」や「礼楽」のみならず、造形的一般にわたっても、統一ある理想的環境を目標にしていたことがわかる。いまに遺されて目近くに在る文様の類にも、[10] その一端が見られる。（第二・三図）

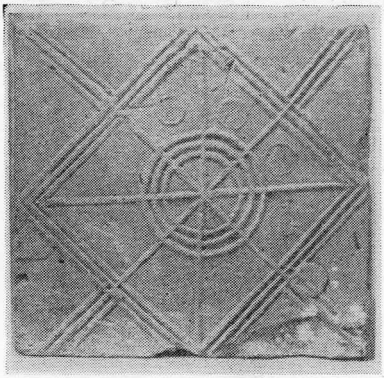


第一図、漢代建築遺址の「規矩」分析図

3

Design は目的、機構に対応して、形態本来の機能の発見と創造を、つねに命題にもつものであるが、その終極は日常生活の充実のためになされるのである。「礼」的社会の生活においても、それは変わるものではない。

「天地」の法則を至上においた観念的な統一思想は、「礼」の世界を理想とするために、音舞や造形による環境からする感情の具体的統一にまで、それを押し進めて意匠の規格を定めたのである。現代的解釈からすれば、「礼」的社会の日常生活に対する逞ましい為政者の Design Policy であったとさえ言い



第二図　文塼瓦　A

第三図　文塼瓦　B

得よう。しかし、それはあくまでも「礼」の理想統一社会にのみ通じるものであって、自然感情の変化とともに、やがて壊れていく過程をたどるのが通則である。

しかし、事態は違っていた。中国民族に根強く底流する感情は、容易にそれが変わる気はいを見せてはいないのである。もつとも時間の変遷とともに、表面に流れる装飾的様式の変化はあったが、その構成を抽象態として捉えてみれば、「規矩」的結構のそれは近世、あるいは現代にまで維持されているものがある。まさに歴史の中に潜在しているといえよう。

4

古代中国系文化圏は、地理的にも広域を占めていた。そこに及んだ文化伝播の様態は、いろいろの変化があつたであろうし、また多くの経路と、時間を要したであろう。

古代日本では、すでに史前に大陸からの影響があったことは周知されている。呪術的原始宗教を背景として、政治的主権を握っていた統治者達には、た

とえ祀る神が大陸の場合とは異っていたとしても、先進国の「天神地祇」に対する祭祀のようすを伝え聞けば、盲目的にもその形式は模倣される可能性がある。そこでは象徴的文様は直ちに受容され、呪術的護符の役目にとって変ったであろうことも、原始的宗教の性質からして考えられることである。(11) その例は、弥生式土器時代の後期から古墳時代にかけて、土器や青銅器（鏡）、棺槨などに表わされた文様類、すなわち鍵手文や直弧文や圏文といわれる一連の文様である。（第四・五図参照）いま伝来した経路は、とにかくとして、入手さ

第四図　直　弧　文

第五図　菱　形　文

れた中国製現物には、前記するような「規矩」形式が、厳格に具わっている。それにひきかえて、仿製鏡の文様や直弧文などから、「規矩」を検出することは不可能で、ただ似かよった意匠であることに過ぎない。中国伝来の規格からは、凡そ遠いものであって、ときに理解できないままの字画や、意味をもたない線の組立てであつて、すべて先進文化の模倣と追従に過ぎない。これらの文様については、日本独自の創作であるとして、如何にも突如として現われた

文様であるかのように、扱われてきたことがあるが、それは事大に過ぎた解釈である。伝来した鋳造技術は、ある程度に進歩した状態を見せているが、文様については、「規矩」の法からすれば、「礼」的な実質を具えたものではない。けだし護符として祈りをこめた一種の指標（Sign）としてならば必要なものであって、古代中国の「礼」の社会における価値とは、何等比べる必要はないものである。その頃の原始日本では、後漢頃までにいくらか変容したと思われる「礼」の形式であっても、それを受容する程の知力は未だ無かったであろう。しかし、前方後円墳の形式になると、やや事情が変っている。その理解について墳形から検討すれば、ある程の進歩を示していることがわかっている。単なる装飾的文様を別にして、土木技術としての前方後円墳の設計には厳格な「規矩」の法が見出されている。ただし墳形は日本にのみ特有している。(12) ここに、文化移入のケースとして、伝播経過における変貌の一面を、看取することができる。

以上については、意匠学的に民族文化の特質を明らかにするのには、もっとも好い資料であると思われる。

古代日本民族は、その現実態から、中国系（先進）文化の実質形態を受容しようとしたが、未だ可能の態勢ではなく、ただ護符の Sign として、象徴的図様の印象だけを強く感受していたに過ぎないのである。それは言い換えれば、客観化された抽象形態を媒介にして、文化吸収の意慾をもった民族に、初期文化の伝播がはじまった様態をあらわしているものである。もともと企画する「規矩」の意匠には、数術を必要とするが、単に規（コンパス）を用いることを学んだに過ぎない直弧文では、数理秩序があったとするような痕跡は認められないのである。(13)

また、このような単純な幾何学的形態には、視覚的に感受摂取がもっとも容易になされる性質があることは、現代心理学で実証されていることである。そ

れは一般的にいって、抽象形態は客観化されて共感をよぶ性質のものであることを意味している。[14]

ここにおいて、低度の文化をもっていた古代日本のシャーマニズム的社会を現実的契機にして、一種の指標 (Sign)か、乃至は、それなりの象徴(Symbol)として、たやすく受け入れたことが了解できるのである。それは形式的要素としての抽象形態が、異民族間にあつても容易に融合の可能性をもつことを示している。言うまでもないが人種的に特有の感受性があるとするならば、受容条件はちがってくるであろうから、一概に原始民族一般に同様の可能性を認めようとすることはできない。しかしながらここでは、古代日本民族の性格が先進文化の摂取に敏感で、模倣に長じ、さらに独自の創造作用を加えたとすることの証左にはなるであろう。

われわれは、古代中国系文化圏において意匠の伝播の様相が、以上のような経過をたどりながら、現実的生活を契機にして変貌するものであることを見てきたのである。

(本論は概説のため、意匠図例及び「規矩」の分析図の詳細を省いた)

1965.9.10

註

1. 高田稿：古代の規矩について (1954 日本建築学会論文報告集第27号) より「礼記」にあらわれた造形の形式について (1959 大阪市立大学、家、紀要第7号) までの一連13篇の論文 (主として建築学会論文集発表) 参照。
2. Edwin D.Harvey: The Mind of China. The World of Spirits, S. 7.
   The Nature of the Soul, S. 48.
3. 高田稿：中国上代における営造意匠の法式 (1960) 日本建築学会論文報告集第66号参照。「天」の法による「象」のことで、造形的「形象」には「象数」をもっている。

4. Laufer. B: Jade, Jade in Religion Worship, The Jade lmage of the Cosmic Deities, S. 121.

5. 吉川幸次郎：支那について、P.18（昭21）

6. 李儼：中国算学史、P.11～21（1937）初版、商務印書館
これには藪内清氏の邦訳書がある。

7. 仝上書、P.22～54

8. 『易経』「繫辞上伝」に、通其変、遂成天地之文、極其数、遂定天下之象、（第五章）とある。

9. 劉致平：西安市西郊土地漢代建築遺址、西安西北郊古代建築遺址勘査初記、文物参攻資料（1957.3期）
同じ報告は、考古学報（1957.2期）、考古通訊（1957.6期）に載せている。（第一図参照）コンパス線と定木線は分析のために加えたもの、円と方の内外接線に注意されたい。菱形文は円内の六稜形の変化である、分析を省く。（第二図文塼A）と比較のこと。

10. （第二図）は　満州漢時代墳墓発見文塼。旅順博物館図録、図版34.35.（昭18.9）座右宝刊行会

11. 中国でも殷代は宗教以前の呪術を信じていた。象徴形の原初は殷代にみられる。
貝塚茂樹：中国の歴史上、P.90.(1965)岩波(第四・五図は直弧文と菱形文を示す例)

12. 高田稿：日本における初期伝来の「規矩」—造菱の意匠について—(1963.9) 日本建築学会論文報告集第89号、この論文には要旨を載せ、技術的分析図を省いている。

13. （第一図）と（第二図A）と（第四図）を一連、（第三図B）と（第五図菱形文）とを一連にして比較されたい。その他の図文と細部の分析図は省く。
第二図から第五図まではともに墓域内のものである。

14. 八木訳：P. ギヨーム ゲシュタルト心理学、P.30, P.49（1952）岩波
(P. Guillaume: La Psychlogie de la Forme)
相良守次訳：W. ケーラー 心理学における力学説、P.115（1951）岩波
(W. Köhler: Dynamics in Psychology)